

日本イデオロギー論(1) : 戸坂潤と竹内好

著者	田中 義久
雑誌名	社会労働研究
巻	42
号	1
ページ	69-47
発行年	1995-06
URL	http://hdl.handle.net/10114/00018763

Actions——Actions という基軸によって、人びとの「日常性の原理」の胎盤としての Actuality——Action System の価値的根拠——によって支えられている。だから、上掲の SQ-1 の「もっと人間的に豊かになりたい」(34%) と「もっと趣味、スポーツ、旅行を楽しみたい」(31%) のシェーレ、もしくは重畳するところ、SQ-2 の「自分には自分なりの生き方があるから」(36%)、の含意はきわめて重要なのである。戦後第一期の民主化が戸坂潤、竹内好の批判していた天皇制ファシズムの否定に立脚する普遍的価値（その例証が日本国憲法第9条の平和主義にほかならない）であり、第二期の産業化がもたらしたものは、生活水準の向上（「所得倍増」！）であり、私生活主義の成立であった。そして、戦後第三期から今日に至る諸規定は、一方から言えば、《経済的》社会関係の内的規定であった労働力の商品化という規定が、1975年以降の生産——流通——消費のトリアーデの全面的情報化の進展とあいまって、今日の消費社会化という市場経済の拡大のなかで、わたくしたちの感性・欲求という「パーソナリティの商品化」という規定にまで拡大され、保持させられている状況を説明するのである。それらは、また、他方、第二期の産業化の規定の延長上で、とりわけ私生活主義の内部規定のひとつとしての「エゴイズム」とそこからの外的諸関係の手段化という契機を通じての、日本社会における初の「功利主義」の意識の全般化された定着・成立の状況として、とらえられるであろう。わたくしたちは、さらに、「もっと人間的に豊かになりたい」・「もっと趣味・スポーツ・旅行を楽しみたい」・「自分には自分なりの生き方があるから」の重合し、凝縮するところで、わたくしたち自身の「常識水準」の行方を見定めなければならないのである。（本稿は、さらに、「功利主義における欲望の位置—清水幾太郎と小林秀雄—」、「欲望から価値への方途—丸山真男と日高六郎—」という現代日本の『日本イデオロギー』分析へと展開されて行く予定である。）

たのお気持ちに近いものがあれば、いくつでも○をつけて下さい。

- | | |
|------------------------|-------|
| 1. もっと働きたい | 11.0% |
| 2. もっと遊びたい | 12.7% |
| 3. もっと人間的に豊かになりたい | 34.3% |
| 4. もっと健康になりたい | 14.2% |
| 5. もっと世の中の役に立ちたい | 12.6% |
| 6. もっと高い地位につきたい | 3.7% |
| 7. もっと自然に親しみたい | 17.8% |
| 8. もっと多くの友人・知人を持ちたい | 21.1% |
| 9. もっと趣味・スポーツ・旅行を楽しみたい | 30.9% |
| 10. もっと信仰を深めたい | 3.3% |

SQ-2 (3または4——生活を変えないほうと答えた人に——)では、生活をお変えにならないのは、どうしてでしょうか。次の中にあなたのお気持ちに近いものがあれば、いくつでも○をつけて下さい。

- | | |
|----------------------|-------|
| 1. 今の生活に満足している | 18.6% |
| 2. 世の中の変化にはついて行けない | 8.0% |
| 3. 昔からの伝統や習慣が大切だから | 11.7% |
| 4. 年齢的に無理だ | 7.5% |
| 5. 経済的に余裕がない | 12.6% |
| 6. 家族が大切だから | 13.8% |
| 7. 自分には自分なりの生き方があるから | 36.4% |
| 8. どう変えてよいかわからない | 4.7% |

戦後50年の歴史過程は、第一期の民主化、第二期の産業化、第三期の情報化・管理化および第四期、すなわち現在、の高度情報化、消費社会化、管理化、の諸規定の累重によってとらえられていた。これらは、すべて、わたくしたち日本人の社会諸関係 (Social Relations) にかかわる規定である。そして、社会関係は、実は、Social Relations——Inter-

的生活領域の方を重視し、その「私」的生活領域における感性と欲求の表現・実現に生活のウェイトを置くライフ・スタイルの「個人的イデオロギー」であった。第四期の消費社会化の社会変動の側面は、この感性と欲求を「新しい市場」として、さまざまな商品と「モノ」を記号化し、ブランド化して行く契機によって支えられていた。ファッション、自動車さらには書籍、雑誌などの文化的な「財」までが、消費者としてのわたくしたちの差異化・個性化のコンテクストを求めて、記号化されて行った。その中枢規定として、生産——流通——消費のトリアーデ全体に対する高度情報化の作用が働いていることは、看過されるべきではない。1985年9月のアメリカ、イギリス、西ドイツ、フランス、日本（G5）の蔵相、中央銀行総裁会議（「プラザ合意」）を境に、日本経済は一段と国際化・グローバル化して行くこととなり、国内的には、マネー・サプライの拡大するなかで、土地投機、株式投資を基底とする「バブル景気」を出現させて行った。

しかし、前掲の、後者の質問に対する解答に示されているように、人びとの「日常性の原理」は、「平成景気」と命名された「バブル」の消費社会化によってその根底をゆるがされるほど、ひよわなものではない。

この点で注目されるのは、次のような、第三の問いに対する解答パターンである。

あなたは世の中の動きに合わせて生活を変えていくほうですか、それとも変えないほうですか。次の中で、もっとも近いものに○をつけて下さい。

- | | |
|----------------------|-------|
| 1. 生活を変えるほう | 5.8% |
| 2. どちらかといえば生活を変えるほう | 38.3% |
| 3. どちらかといえば生活を変えないほう | 43.1% |
| 4. 生活を変えないほう | 10.8% |

SQ-1（1または2——生活を変えるほうと答えた人に——）では、生活を変えるために、どんなことをしたいと思いますか。次の中にあな

4. まったく同感できない 8.1%

あなたにとって「生きがい」とはどのようなものですか。次の中から、あなたのお考えに近いものを一つだけあげて下さい。

1. その日その日を愉快地に楽しく生きること 10.6%

2. この世で自分が果たすべき使命を持つこと 9.3%

3. 家族やまわりの人々とうちとけて過ごせること 18.4%

4. 人間的により豊かなものを求めて努力すること 25.9%

5. 生活の目標をたてて着実に生きること 10.6%

6. 家族やまわりの人から頼られたり、人々の支えになること
13.6%

7. 能力を思いきり発揮して自分にしかできない新しいものを生みだ
すこと 4.9%

8. これまで知らなかった新しいものを知ったり、手に入れたりする
こと 1.5%

9. その他 1.6%

1991年12月の時点で、わたくしたち日本人の「日常性の原理」のひとつの側面は、このようなデータとなってあらわれていた。(田中義久他『コミュニケーション行為と高度情報化社会』科学研究費補助金(総合研究A)研究成果報告書, 1993年, 参照) 1986年以降の戦後日本の歴史過程の第四期——高度情報化, 消費社会化, 管理化の時代——の進展のなかで、日本人の客観的な観念形態・意識形態, 「社会的イデオロギー」のうちなる「日常性」のかまえは、きわめて冷静である。前者の質問に対する解答の出方は、わたくしたち日本人の社会意識のなかでの「公」と「私」の関係についてのかまえを示すもので、すでに、第三期(1975年~85年, 情報化と管理化の段階)に定着しはじめていた。わたくしは、それを、1960年代後半の日本経済の「高度成長」の所産としての「私生活主義」として、定位したことがある。(田中義久『私生活主義批判』1974年, 筑摩書房) それは、「公」的生活領域よりもどちらかと言えば「私」

をもった価値体系を計ることは許されない」とし、「私は仕事の計画から云って、何を前にし何を後にするかという組織が組み立てられる、今日という現在はこのような遠近法を与える」と述べているのも、すべてこの一点に収斂する。すなわち、歴史的時間の流れに刻み目を入れて、時代と時代の推転を生み出すところの「時代の性格」は、その時間の流れを生きる人びとの日常生活の行為の体系とそこに内包される「個人的イデオロギー」の内容によって characterise されるのであり、そのような日常生活の行為の体系と「個人的イデオロギー」の内側にどのような価値と価値合理性とがはらまれているかということこそが「常識水準」の意味するところであった。

1935年、戸坂潤の『日本イデオロギー論』における「常識」の分析は、「常識はもはや今日地上のどこにも見当らぬ。常識は『地下室』などに押し込められて了って、常識の根は押しつぶされて了いそうに見える」という暗い述懐で終わっている。この『地下室』は、ドストエフスキーの『地下生活者の手記』のそれであり、埴谷雄高に『死霊』を書きはじめさせた独房のそれであった。そして、今、わたくしたちは、高度情報化、消費社会化、管理化の時代のもとで、わたくしたち自身の「日常性の原理」の内実を検討し、そこにおける「常識水準」のベクトルの方向を見さだめなければならないのである。

四

「今は、まず個人としての生活の内容を充実していくことが第一で、社会全体や国のことにまで考えがまわらない」という意見がありますが、あなたのお感じは、次のように分けるとどれにあたるでしょうか。

- | | |
|-------------------|-------|
| 1. まったく同感 | 12.7% |
| 2. どちらかといえば同感 | 45.7% |
| 3. どちらかといえば同感できない | 30.9% |

の基準となるものだ。それは、「立体的な内容を平面化させずに取り出すための概念」であり、「上属性格に関して下属性格を Konfigurieren する原理」にはかならない。こうして、戸坂潤は、いわば、アインシュタインやハイゼンベルグの物理学における「ローレンツ変換」や「ミンコフスキー変換」に対応する位置をもつものとして、人びとの「社会的イデオロギー」と「個人的イデオロギー」を媒介し、変換するところ（Konfigurieren するということはこういう意味である）に「性格」の概念を定礎し、それを内容的に支えるものとして、「日常性の原理」を提起するのである。

戸坂潤は、歴史的時間はわたくしたちの「生活の時間」であるとし、次のように述べる。「現代のもっている原理的意味は今日の持っている原理的意味である。それは今日の原理——日々の原理——である。こうして歴史的時間は『日常性の原理』に支配されていることになる。（中略）歴史的時間と同値だと云ったかの性格は、実はこの日常性の原理となって現われるのであった。」しかも、それは、Actuality の原理であり、人びとの日々の生活の内容をなす act=wirken の体系の性格にはかならないのであった。それは、そのような内容をもつものとして、「現実性の原理、又事実性の原理である。従ってこれこそ実践性の原理である。」（『現代哲学講話』八「日常性の原理と歴史的時間」）

このようにして、歴史的時間は、人びとの日常性のなかを経過し、それによって透過されることを通じて、時代の性格へと翻訳されてくることになる。時代は、今や、わたくしたちの日々の生活のなかでの行為、活動（act=wirken）の体系によって、それ自身のパースペクティブにふさわしい価値のコライドスコープをうきぼりにしてくるのである。戸坂潤の Konfigurieren というのは、このような意味で、人びとの生活の時間の内側にある「日常性の原理」からの、時代の性格の《上向的》布置連関の構成であると言ってよい。戸坂潤が、「だから私は明日——之はまだ来ない可能性に過ぎない——の価値の尺度を以て、今日の現実性

水準と呼ばれた水準に相当するものであった」(傍点は戸坂潤による)と主張する時、そこでは、ジェルジ・ルカーチの『歴史と階級意識』(*Geschichte und Klassenbewusstsein*, 1923)の視座が前提とされていたであろう。

さて、戸坂潤は、『日本イデオロギー論』の第一編「日本主義の批判とその原則」のなかの三「『常識』の分析」において、「日常性の原理」とは Actuality の原理であると述べ、「之はドイツ語では現実——Wirklichkeit——と呼ばれる。act=wirken。」と注記している。この点をより詳細に分析しているのが、『日本イデオロギー論』の前年に刊行された『現代哲学講話』(1934年11月、白揚社)のなかの第二編の八「日常性の原理と歴史的時間」である。戸坂潤は、もともと、自然科学の方法論的基礎の解明に志向していたのであり、西田幾多郎、田辺元の京都大学哲学科でまとめた卒業論文は「空間論」であった。これは、カントの空間概念の検討から、「幾何学的空間」および「物理学的空間」の分析へと進み、最終的に「空間とは自然という存在の仕方の性格にほかならない」という結論を導出している処女論文であるが、戸坂潤は、「日常性の原理と歴史的時間」において、この視座を、今度は「物理学的時間」、そして歴史的時間の概念へと適用しているのである。この論文の末尾に「恰も物理学的世界像で、相対性の原理(アインシュタイン)や不確定性の原理(ハイゼンベルク)が占めているような位置を、歴史学的世界像では、この日常性の原理が占めはしないだろうか」と述べているのは、このような結縁をものがたるものであろう。

戸坂潤は次のように言う。「歴史的時間はそれ自身の内容によって時代にまで刻まれる。内容はその場合恐らく無限の多様であるが、之が形式化されずにあくまで内容的に止まりながら、なお且つ一定の諸形態の下にぞくするものとして取り出される時、必要なのは性格という概念である。」戸坂によれば、性格は、個性や個体などとは異なって、そのように分割されたものではなくて、逆に、分割——歴史的時間の刻み——

れている「文化擁護国際作家大会」特報という記事である。これは17ページに及ぶ重要な記事で、1935年6月21日～25日、パリで開かれた「文化擁護国際作家大会」(Congrès International des Ecrivains pour la Défense de la Culture)の内容を詳しく報告している。討論の様子を伝える写真も掲載されており、そこには、アンリ・バルビュス、ハインリッヒ・マン、アンドレ・ジイド、ポール・ニザン、イリヤ・エレンブルグ、アンドレ・マルロオらの顔が見られる。とりあげられたテーマは、「文化遺産」、「社会に於ける作家の役割」、「個人」、「ユマニズム」、「民族と文化」などで、最終日の夜の「文化の擁護」と題されたセッションでしめくくられている。この最終討論がルイ・アラゴンによって口火を切られ、次いで後のノーベル賞作家ボリス・パステルナークが発言し、アンドレ・マルロオの「希望を意志に、ジャックー（1357年、フランスに起こった農民一揆）をレヴォリューションにと考えながら、幾千年かの人類の苦悩を以て人類の意識を高めなければならない」という結語によって結ばれているのは、きわめて印象的である。

こうして、戸坂潤の常識の概念の検討と「常識水準」のそのの提起は、「人民戦線」(Front Populaire)というファシズムと戦争に反対する民主主義共同戦線の国際的な広がりという背景のもとに行なわれていたのであった。人民戦線は、フランスでは1935年6月に成立し、翌36年夏～38年秋、政権を掌握しており、スペインでも、1936年1月に成立し、同年2月から39年初めまで、フランコに対抗する国民戦線政府を実現していた。ある意味では、唯物論研究会と『世界文化』も、天皇制ファシズムのもとでの日本版「人民戦線」の具体化された活動形態であった。そして、戸坂潤が「常識水準は階級的対立に従って分裂対立する。知識——科学に階級性（階級的対立）があったように、そして、知識——科学の論理が階級的党派性の首尾一貫に他ならなかったように、常識にも亦階級性・階級的対立が、そして階級的党派性の首尾一貫が存する。そうして知識——科学について『論理』と呼ばれたものがここで『常識』

年12月)のメンバーであり、リーダーのひとりであった。唯物論研究会の発起人のなかには、長谷川如是閑、服部之総、羽仁五郎、林達夫、加藤正、住谷悦治、本多謙三などが含まれていた。「現実的な諸課題より遊離することなく、自然科学、社会科学及び哲学に於ける唯物論を研究し、且つ啓蒙に資するを目的とす」(「規約」)とうたわれていた唯物論研究会は、しかし、当代の歴史的現実のなかで、「我が国唯一の強力なる文化団体」(内務省警保局編『社会運動の状況』1938年版)であった。そして、わたくしたちは、時を同じくして、1935年2月、京都で創刊された雑誌『世界文化』(全34号、33冊が刊行された)の活動を看過してはならないであろう。『世界文化』創刊号の表紙の裏には、次のような宣言が掲げられていた。

歴史に於ける一つの歴史的な時代として此の時代を特徴づけるのは、確かに当てゝる。これまでの時代の何とか解釈のつけ得られた、あり来りのテムポが、破られて、乱れて、所謂『非常時』——危機——なのである。(中略)時代のテムポがすっかり変ってゐて、自分がそれについて行けるか、行けないか、に迷ふ。今までのものが無意味に見える。ニヒリズム。正に此の様な不安とニヒリズムとに、此の時代のインテリゲンツィアの敏感な部分が今、立ってゐる。学問文化への不信頼と絶望。だが、まじめな頭と胸は、到底此の様な不安と絶望には堪へられない。新しいしっかりした、もう再びは背かれることを知らない文化の、大通りを探し求めざるを得ない。(中略)この雑誌も、出来上った、一定の場処に落ついてゐる人とのものではなくて、たえず、本当のもの、正しいものを求めつつ、動いてゐる人々の友である。真理の扉を、たたくことを忘れないでゐる真摯な手によってのみ、この雑誌は育てられるであらう。

『世界文化』の同人には、中井正一、新村猛、真下信一、武谷三男、久野収、和田洋一などが含まれていた。そして、わたくしが、ここで、とくに注目するのは、『世界文化』の第8号(1935年9月号)に収録さ

三

戸坂潤は、わたくしたちのさまざまな「個人的イデオロギー」のうちに共有され、分有されている常識（Commonsense, Gemeinsinn）の検討を通じて、「日常性の原理」の分析へと遡上する。60年前の天皇制ファシズムのもとで、「感覚」（Sense）や「意味」（Sinn）が出発点におかれていたことは、注目されてよい。なぜなら、今日の高度情報化、消費社会化、管理化の日本社会における「社会的イデオロギー」としての功利主義の分析の出発点もまた「感覚」であり、そこにおける「意味」の所在にほかならないのだから。戸坂は、「センスやジンやサンスという外国語は事実この転化（共通感覚から共通感覚への転化——引用者注）をよく示しているので、単に感覚を意味するだけでなく、それが意味という言葉や核心という言葉さえ意味するようになるのを注意すべきだ」（『日本イデオロギー論』第一編日本主義の批判とその原則、三「常識」の分析）と、述べていた。

戸坂潤は、さらに、それぞれの時代の常識のうちに、ひとつの「水準」を見出そうとする。

「……常識水準とはその時その時に与えられた社会人の見識の平均値のことではなくて、却って、この平均値を高めるべき目標・理想線を意味している。この理想線の方眼紙上の位置は不定であり、或いはその位置を問題にすることは不可能なので、平均値のあるところ常にその近くにこの常識水準が力の場のような作用を持って横たわっているのである。本当の常識はそれ自身いつも低下し消散し死滅して行く或る生きものだが、これを常に刺激して生きて行かせ保持発達させるものが、この常識水準という言葉の意味でなくてはならぬ。丁度真理とは真理を保持し高めるものごとであるように、常識とは常識を保持し高めるものごとだ。」（「常識」の分析）

戸坂潤は、よく知られているように、唯物論研究会（1934年10月～37

わけもないと思うようなこともその一つの理由だが、一そう根源の理由は、私が批評というものについて考えている考え方が、そういう始末となるのだと思う。」(保田与重郎「我が最近の文学的立場」、傍点は竹内好)第二次世界大戦の泥沼化して行く歴史過程のなかで、わがくにの「日本主義」と「ファシズム」は、日本社会そのものの原始化に歩調をあわせるようにして、一方において「社会的イデオロギー」を観念のバルバライと化し、他方、人びとの「個人的イデオロギー」を内容のない美文で彩るようになる。保田の文章に傍点をふった竹内は、この文章を指して、「これは天の声か地の声であるかもしれないが、人間のことばではない。(中略)彼はあらゆる思想のカテゴリーを破壊し、価値を破壊することによって、一切の思想主体の責任を解除したのである。思想の大政翼賛会化のための地ならしをしたのである」と述べた。(「近代の超克」、1959年)

「近代の超克」は、戸坂潤『日本イデオロギー』の時代の天皇制ファシズムのキー・ワードのひとつであり、いくつかの重畳する意味の磁場をつくりだすイデオロギー的シンボルであった。わたくしは、実は、1940年に生まれた。したがって、赤ん坊だったわたくしの周辺には、「撃ちてしままん」、「鬼蓄米英」あるいは「ゼイタクは敵だ」などのことばが氾濫していたのであろう。

そして、いま、高度情報化、消費社会化、管理化の日本社会にあって、わたくしたちは、ほんとうに近代的な「日常性の原理」をわがものとし、ジョン・ロック以降の政治的自由をわたくしたち自身の「個人的イデオロギー」の内側から実質的に支えることができる「常識水準」の高さを保持しているであろうか？ 高度情報化、消費社会化、管理化の規定のもとでの、現代日本の「社会的イデオロギー」の胎盤とも呼ぶべき功利主義 (Utilitarianism) の瀰漫は、その内部に、どのような価値を結晶化し、どの程度の価値合理性を析出しつつあるのであろうか？

て発達した。之はやがて近代自由主義とデモクラシーとの哲学的原理となったものだ。」(補足, 二「大衆の再考察」) 悟性というかびくさいことばは, 今日のわたくしたちの生活実感にそぐわない——ジョン・ロック自身が首をかしげ, 苦笑するであろう——悟性とは, 『広辞苑』によれば, ①感性的所与を対象とし, それに基づいて概念を構成し, 判断および推論を行う精神活動, ②広く知性一般のこと, である。それは, カント, ヘーゲルのドイツ観念論のなかで, 感性 (Sinnlichkeit) と理性 (Vernunft) とを媒介する中間領域 (Verstand) として位置づけられたが, イギリス経験論にあっては, 感性的認識から理性的認識への連続的過程を示すことばとして理解されていたのだから, 今日では, 悟性というイメージのわきづらい概念よりも, むしろ, 『広辞苑』の②にしたがって, 知性・知的能力という概念でとらえておく方がよいと思う。The Concise Oxford Dictionary でも, Understanding とは Intelligence のことなのである。

戸坂潤は, こうして, 1935年という時点において, 当代の「日本主義」と「ファシズム」に対抗するよりどころを, わたくしたちひとりひとりの日本人の「個人的イデオロギー」の合理性を底礎する「日常性の原理」の内実にもとめ, その質的合理性によって担保される日本人の「常識水準」を確定しようとしていたのであった。1935年という年は, 美濃部達吉の「天皇機関説」が問題化され, 国会でわがくにの「国体明徴」が決議された年である。前年には, ドイツでヒトラーが総統に就任しており, 翌36年には, 日独伊枢軸体制が固まり, スペインの内戦がはじまっている。そして, 戸坂の『日本イデオロギー論』刊行の5年の後, 1940年には, 次のような文章があらわれる。

「ある面で私の書くものはひとりよがりと言われているようである。これは率急なせいであろうししかし一面では私が批評というものをどう考えているかということから由来しているのではなかろうかと思う。私は感動させたノートは, ノートとしてだけで人につたえるねうちがない

『人間悟性論』は単に観念が経験から生み出されるという経験論を主張するだけではなく、同時に悟性こそが人間の、即ち又個人の、核心をなすものだという想定に立脚しているのである。彼はそこでこの悟性＝理性の内に、個人の政治的自由の根拠を見出そうとする。なぜなら個人の悟性こそ自由でなければならないからだ。悟性の自由において他に同等の権威も根本的に云うとあり得ないと考えられる。」(第一編、日本主義の批判とその原則、四「啓蒙論」)

ここで『人間悟性論』と言うのは、もちろん、John Lock, *An Essay concerning Human Understanding*, 1690., のことである。いま、わたくしの手許にあるピーター・H. ニディッチの編集による1975年のOxford University Press刊行本によると、その内容は、四部構成で、第1巻は「神学的・形面上学的な Innate Notions」批判、第2巻「Ideas について」の戸坂のいわゆる「観念が経験から生み出されるという経験論」の確認であり、第3巻「Words について」および第4巻「Knowledge と Opinion について」によって「個人の政治的自由の根拠」としての近代的認識主体の形成が論証される、という構成になっている。なお、第4巻第21章では、「セメイオティケー」(σημειωτική), すなわち the Doctrine of Signs という記号論が提起されており、その論理は今日の「マルチ・メディア」状況の情報化社会にまで到達し得るものとなっている点も、看過されるべきではない。

さて、戸坂潤は、『日本イデオロギー論』の後段で、もう一度、ロックに言及する。「大衆に自分自身による組織性を認めないことが、所謂ファシズムによる大衆概念の特徴であるが、その意味に於てこの大衆はそれ自身に於ける合理性を認められていない。血液や信念や肚や人物の類だけが、凡そこうした大衆の内に見出される一切のヒューマニティーでなければならない。——大衆にとに角一応の合理性を認めるためには、大衆のヒューマニティーをその悟性 (Understanding) の内に見出さなければならぬだろう。近世イギリスの人間論はこの人間悟性を中心とし

に沿って往来する人間や動物などの姿を、ただその影においてとらえるにすぎない。あるいは、それら人間や動物たちの話し声、鳴き声を耳にして、それらの姿を推しはかることしかできない。囚人である人びとは、けっして《実像》をとらえることがなく、ただ投影された影、反響する声をうけとるのみである。「それは奇妙な比喩、奇妙な囚人ですね」と言うグラウコンに対して、ソクラテスは「われわれに似た者だよ」と述べている。

高度情報化・消費社会化・管理化の段階にある現代日本社会のなかで、わたくしたちは、プラトンの時代とは比較にならないほど巨大化した社会諸関係の累重のなかを生きており、コンピュータで管理された生産・流通・消費のシステムによって産出される無数の商品の氾濫にとりまかれ、「マルチ・メディア」と喧伝されるメディア・ミックスと記号・情報のマス・ディストリビューションのうちに日々の日常を生活している。ただし、《実像》をとらえることなく、ただ投影された影、反響する声をうけとるのみだ、という認識の構造は、プラトンの時代も、今日も、同一である。

60年前の日本社会において、当代の天皇制ファシズムから日本人の観念形態・意識形態の合理性を護るべく、わたくしたち日本人の「個人的イデオロギー」に内在する「日常性の原理」と「常識水準」とに留目した戸坂潤は、その『日本イデオロギー論』のなかで、その論理構成上かなり重要なポイントで、二回、ジョン・ロックに言及している。彼は、まず、次のように述べている。「経済的・政治的・道徳的・自由、行動と意志との個人的自由が、ロックによって初めて強調されたことはよく知られている処である。之が当時の封建的残存物・絶対王権・カトリック政権の打倒を要求した近代ブルジョアジーの最も代表的な政治的イデオロギーであったことは云うまでもないが、今必要なのは特に、このイデオロギーがロックの手によって個人の知的自由・理性乃主悟性の自由・というものによって根柢を与えられたという点なのである。彼の『人

うすこし厳密に言えば、現代日本におけるさまざまな「社会的イデオロギー」の布置連関のもとでの、わたくしたち日本人ひとりひとりの「個人的イデオロギー」の内面的構成にはほかならないのである。

椎名誠が述べているように、わたくしたち日本人は「遠くを見なくなった」。目前に、天空高く、一生に一度か二度しか見られないような見事な人道雲がわき立っていても、バス停のオバサンたち、子供たちには、それが見えない。今日、わたくしたち日本人の「個人的イデオロギー」の概念装置には、自然のみずみずしい、美しい躍動が価値あるものとして、「意味あるもの」(significantなもの)として見えてこない。オバサンたちの世間話は、ショッピング・ストアのバーゲン・セールの情報交換であり、テレビ・ドラマの番組批評のやりとりであるかも知れない。子供たちの「テレビ・ゲーム」や「ファミコン」に馴らされた眼に、人道雲は「たいくつ」な存在であり、偏差値のポイント上昇に「役に立たない」存在なのであろう。

デステュット・ド・トラシーの『イデオロギー要論』の視座の原型は、プラトンの『国家』第7巻における「洞穴の比喩」にまでさかのぼる。紀元前4世紀のこの書物のなかで、ソクラテスは次のように言う。「いわば洞穴のような地下の住居に人びとが居る。その住居は太陽の光に向かって口の開いている洞穴の幅いっぱいの奥深い入口を持っている。そして、その人びとは、その住居の中に、子供の頃から手足も首も縛られている。そのために、彼らはその場所に留まっていて、ただ前方だけを見ることになる。その縛めのために頭をぐるりと廻すことができないので。それから、また、こう想像してみたまえ——彼らのためには、火の光が彼らの後の高くて遠いところで燃えている。その火と囚人とのあいだには、上の方に一つの道がある。そして、この道に沿って壁が建てられている。ちょうど操り人形師の前に、見物人に面してその上の方で操り人形を示す仕切壁が設けられているように、ね。」(Platón, *Politeia*, 山本光雄訳『国家』, 1973年, 378頁) 囚人は、この「仕切り壁」の小壁

界を、気持ちのタカラモノを、日本人はだれも見なくなってしまったのだろうか。」(椎名誠「遠くを見なくなった日本人」『朝日新聞』1995年1月10日)

日比野和幸のいわゆる「イデオロギーという幻想」は、前述のイデオロギー概念の三つの文脈にかかわらせて言えば、第二の文脈のなかの「部分的イデオロギー」、あるいは「特殊的イデオロギー」の側面での「全体的イデオロギー」にあたるものだ。たしかに、1989年11月の「ベルリンの壁」の崩壊に象徴されているように、旧ソ連・東欧型の「国権的社会主義」という社会主義の「部分的イデオロギー」は、ほとんど消滅している。しかし、人口12億という中国の社会主義の「存在」があるからには、社会主義という「全体的イデオロギー」のひとつの類型の死を宣するのは早計というものであろう。

また、「進歩幻想」と日比野が言うものについては、おそらく「ポスト・モダン」の議論への言及が必要になるのであろう。一部の「ポスト・モダン」論者(たとえばフランソワ・リオタール)が主張しているように、デカルトのCogitoにはじまる近代的認識方法の成立とその基盤の上に生成してきた科学・技術の体系が「モダン」の原動力として、今日、批判されるべき側面をもっていることは、環境破壊の問題ひとつとってみても明らかである。にもかかわらず、その「モダン」の体系のなかで析出され、結晶してきたフランス大革命の自由・平等・友愛という「価値」まで否定されるべきものであるかどうかということになれば、おのずから、問題はまったく別の様相を呈してくるであろう。

わたくしたちが現代の「日本イデオロギー論」の分析対象として定位するのは、20世紀の《世紀末》の最終局面において(したがって、逆の位相から言えば、21世紀のパラダイムを構想する「助走路」に立って)、同時に、第二次世界大戦の敗戦の後50年という歴史の曲り角において、わたくしたち日本人の客観的な観念形態・意識形態がどのような姿態を示しているかということであり(イデオロギー概念の第一の文脈)、も

者の関連についての合理的認識をもたらし(分析体系)、③自己の願望と確信とによって潜在的エネルギーを意志的に活性化する(信念体系)とともに、④具体的なイシューについての日常的な意見の体系(政治的プログラム)を提起する。このような内容を有する観念形態・意識形態が現実特定の階級や組織によって担われている時、それは「社会的イデオロギー」と呼ばれる。そして、このような「社会的イデオロギー」が人びとの経験的諸条件に規定されつつ個人的人間のうちに内面化され、屈折させられている時、それを「個人的イデオロギー」と呼ぶ。(詳細は、田中義久『社会意識の理論』、1978年、を参照されたい)

わたくしは、戦後50年の転機を迎えた今年、わたくしたち日本人の観念形態・意識形態のありようを注視すべく、年頭のマス・メディアとジャーナリズムの提起するメッセージに眼をこらしていた。わたくしの眼にとまったのは、次の二つの文章である。

「イデオロギーという幻想は、すでにあえなく雲散霧消した。まことに結構なことと申すべし。しかし、いくつかのあやしげな神話は今なお健在だ。人類の進歩などというのは、その最たるものだろう。(中略)なによりも進歩的な幻想を疑ってかかった方がいい。ことによると人間は、猛烈な勢いで退歩しつつあるかもしれないのだ。」(日比野和幸「人間退化論——華が咲かない20世紀末——」『朝日新聞』1995年1月4日)

「昨年モンゴルで撮ってきた映画の編集をするために連日多摩川べりの撮映所にかよっていた。(中略)夏の終わりの夕方、撮映所前のバス停でバスを待っていると、目の前にとてつもなく巨大な、一生のうちに何度見ることができるかどうかわからないような素晴らしい入道雲が出ていた。バスを待つ人々が何人もいたが、だれもそんな雲を見ていなかった。

せめて子供連れのオバサンたちに気づいてもらいたかった。オバサンたちは何かうるさく世間話をしていた。大人が気がつかなければ子供だって空を見ない。子供らは子供でおしゃべりしていた。遠くでっかい世

第3巻「論理」と内面的検討を加えられた *idée* が、第4巻・第5巻の「自由意志とその諸帰結」において、「政治・経済学的分析」を加えられ（たとえば第4巻，第8章「諸個人のあいだでの富の分配」，第9章「諸個人もしくは人口量の多元的分化」），そのような「存在」に貫通された上で，第5巻の終章「愛について」(De l'Amour) で人びとの関係性の地平に定位されている。

イデオロギーということばは，第二に，その観念形態・意識形態の広がりや自覚的対象化の違いに応じて，カール・マンハイムの提起しているように，「部分的イデオロギー」と「全体的イデオロギー」に区分され，後者はさらに「特殊的イデオロギー」と「普遍的イデオロギー」へと，類型区分されている。(K. Mannheim, *Ideologie und Utopie*, 1929) マンハイムによれば，「部分的イデオロギー」によってとらえられるのは，「敵対者の特定の『理念』や特定の『考え』」である。これに対して，「全体的イデオロギー」とは，ある時代の支配的イデオロギーとかある歴史上の階級・階層に特有の思想体系と経験・解釈の様式のように，時間的・空間的な広がりをもった「存在」に支えられた観念形態・意識形態のことである。したがって，たとえば，資本主義と社会主義とは，いずれも「全体的イデオロギー」の類型に属する。しかし，資本主義に与するものが社会主義イデオロギーを批判する場合，あるいはその逆のケースは，「全体的イデオロギー」を議論してはいるけれども，まだ，「特殊的イデオロギー」の地平での議論の仕方にとどまっている。「全体的イデオロギー」概念を普遍的に把握するようになるためには，「敵の立場だけではなく，原理上いっさいの立場を，つまり自己自身の立場さえ，イデオロギーとみなす勇気がなければならない。」(マンハイム)

さて，イデオロギーということばは，第三に，現代社会学において，次のような内容をもつものとして理解されている。それは，人間・自然・社会についての現実的かつ観念的な意識形態のことであり，①人びとの生活に根底的な意味を与え（価値体系），②自己と環境世界および両

年を一とすると、1950年が一・二であり、1990年は三万二、二四九というすさまじい膨張を示しており、円の価値そのものの変動要因を勘案してみても、その拡大のほどが知れよう。(卸売物価指数でデフレートしてみると、実質で43倍の拡大を示している。資料は矢野恒太記念会編『日本の100年—日本国勢図会長期統計版—』1991年版および『日本国勢図会』第52版、による。)

現代の「日本イデオロギー論」は、このような戦後50年の歴史過程とそのなかでの社会変動を通じて、第一に、戸坂潤が提起していたように、わたくしたち日本人の社会意識の内部での合理性の所在とその実質を検証しなければならないのであり、第二に、竹内好が提起していたように、明治維新以後のわがくにの近代化がどのような病理と矛盾を内包していたかを再確認しなければならないのであり、そして第三に、わたくしたち自身の課題として、とりわけ戦後第三期・第四期の日本経済の高度化とのパラレリズムにおいて成立し、顕現してきているところの日本版「功利主義」の意識の内実を全面的に検討し、まさしくその深部において、わたくしたちの社会意識がどのような質をもった合理主義をわがものとしているのか、を明らかにしなければならないのである。

二

イデオロギーということばは、大略、次の三つの文脈で議論される。第一に、それは客観的な観念形態・意識形態としてとらえられる。しかも、それは、*idée*としての「理念」それ自体ではなくて、人びとの社会的「存在」へと関連づけられ、いわば、「存在」によって貫通された観念形態・意識形態である。このようなとらえ方の原型は、デステュット・ド・トラシーの『イデオロギー要論』(*Éléments d'Idéologie*, 1801~1815, 5vols.)によって、示された。そこでは、第1巻第1章「思考とは何か?」(*Qu'est-ce que penser?*)にはじまり、第2巻「文法」

旗手として、21世紀の《経済的》社会関係の構造モデルに擬せられている。1986年からの「平成景気」というバブル経済のもとで、供給情報量・消費情報量は幾何級数的に増大し、生産と消費を媒介する流通機構へのコンピュータ導入の進展とあいまって、今日の日本には、世界に類例のすくない「消費社会」が出現している（この時期の高度情報化と消費社会化のオーヴァーラップする圏域については『通信白書』1988年版が示唆的であり、そこでは、情報化・消費社会化に関連する諸指標がいずれも1986年から「右肩上り」の顕著な増勢を示している）。

こうして、戦後日本の50年の歴史過程は、今日、高度に「純粹化」した資本主義社会の社会諸関係の重層構造から成る「システム」を生成し、それに対して、諸個人の極度に「私化」した生活世界を対峙させているかの如くである。だからこそ、前近代——近代——「ポスト・モダン」（超近代であると同時に脱近代）という基軸について語られることが意味をもつようになってきたのであった。しかもなお、現代日本の「システム」のなかに依然として「旧意識」の残滓は包摂されているのであり、わがくににおける「システム」の現在は、けっして、前近代の封建制の遺構を粉碎しているわけではない。「ポスト・モダン」の超近代に逆流し、脱近代がファシズムを定礎し得たことがあるという事実も、わたくしたちが戸坂潤、竹内好のふたつの日本イデオロギー論のひそみにならって、今日、もう一度確認しておかなければならないことがらなのである。

1930年のわがくにの総人口は6,387万人であり、1950年に8,320万人となり、1990年には1億2361万人となっている。人口量の面からは、たしかに増加はしているが、ことさらに驚くほどのものではない。しかし、これを国民総生産（GNP）の面から見ると、実質で、1930年が134億9,300万円、1950年が161億1,500万円であり、1990年には、実に、435兆3,620億円となっている。（1930年、1950年については、経済企画庁『国民所得白書』1955年版、1990年については経済企画庁『1992年度国民経済計算』による）経済活動の面から見た日本社会の「サイズ」は、1930

第二期の産業化 (Industrialization) の時期に、この「醇風美俗」のモーレスとイデオロギーは、企業の「会社」社会のなかにひきつがれ、そこで、あらためて日本的「集団」主義として活性化されてきた。この「高度成長」の時期は、かつての天皇制——庶民という「公」——「私」の基軸を企業社会——私民 (私生活主義の主体) のそれへと転形し、同時に、その企業社会の社会諸関係のうちに「醇風美俗」の習俗を着実に再生させ、結果として、人びとの「職場」における旧意識と「家庭」における私生活主義とをメダルの表裏とする社会意識を生みだしたのであった。

第三期の情報化・管理化の時期は、戦後日本の上述のような近代化過程の上に、1973年・74年および1978年という二度のオイル・ショック (エネルギー危機) を外的契機として、情報化の実質を成すコンピュータライゼーションを付加して行った段階である。管理化の側面は、直接的には、1970年代後半から80年代前半にかけて急激に進行した中央・地方の行政官庁におけるコンピュータ導入による国民・住民の管理のソフィステイクーションを指しているが、間接的には、次の第四期にその含意を最大限に具体化して行くことになる商品と記号の生産・流通・消費のコンピュータライゼーションとそれにもとづく「欲望の管理」の深まりという事態を指している。

第四期の高度情報化・消費社会化・管理化という段階は、まさに、わたくしたちが生きている現代日本の社会である。1985年9月のアメリカ、西ドイツ、日本、イギリス、フランスの先進5ヶ国蔵相会議による「プラザ合意」以後、日本社会は、対外的には世界経済の「主役」のひとりとして完全にグローバルな景気変動の波のなかに包摂され、対内的には、一方で1990年代前半以降の日米構造問題協議が示しているように日本型「企業社会」の社会諸関係の「透明性」の増大——規制緩和・排他的商慣行の改善、「ケイレツ」の改編など——を求められ、他方、R. ボワイエらのレギュレーション理論の視点からは、「ポスト・フォード主義」の

ある。暗い夜に火をともしつづけたこの鋭い頭脳は、もし生きていたら、今日改めて思想形態の日本的特質の分析をテーマに取り上げるかもしれない。日本イデオロギイは形を変えて、げんに復活しつつあるのだから。」竹内好は、今日まさにその脱構築を迫られ、大きく動揺している「55年体制」の成立にさきだつ戦後第一期——それは、のちに詳述するわたくしの視座からすれば、内容的には民主化の時期であり、現象的には西欧化の時期であった——のさなかで、わたくしたち日本人のナショナリズムの実質を問い、わがくにの近代化の歪みを衡いていた。本稿では、戸坂潤『日本イデオロギー論』、竹内好『日本イデオロギイ』の基軸に竹内好「近代の超克」（1959年）の視座の検討を加え、その延長上において、1995年の日本イデオロギー分析の端緒を明らかにして行くことにしたい。

わたくしは、1945年～1995年の戦後日本の歴史過程を、次のような時期区分においてとらえている。

第一期（1945年～55年） 民主化・西欧化（Westernization）の段階

第二期（1956年～74年） 産業化の段階

第三期（1975年～85年） 情報化・管理化の段階

第四期（1986年～95年） 高度情報化・消費社会化・管理化の段階

第一期の民主化の段階は、一方における農地改革（1945年～46年）による寄生地主制の解体と農村におけるゲマインシャフト的社会諸関係の再編成、他方における民法改正（1947年）による家族の社会諸関係の再編成を経て、まさしく戸坂潤『日本イデオロギー論』の照射していた「日本主義」・「ファシズム」の中軸に位置していた天皇制「国体」観念と家父長制イデオロギーを武装解除した。しかし、さまざまな制度的改革のもとで、なお、「下から」の旧意識とも呼ぶべき「醇風美俗」の村落共同体的モーレスは残存しつづけていた。竹内好『日本イデオロギイ』がうきぼりにし、批判するのは、まさしくこのような意味での「旧意識」と「民主化」の奇妙な共存の実態にほかならなかつたのである。

日本イデオロギー論(一)

——戸坂潤と竹内好——

田 中 義 久

—

戸坂潤は、一九三五年、『日本イデオロギー論』（白揚社）を書いた。竹内好は、一九五二年、『日本イデオロギイ』（筑摩書房）を書いた。そして、いま、三度び、「日本イデオロギー論」が書かれるべき時であり、状況である。

一九九五年の今日、わたくしたちは、戸坂潤が日本ファシズムに抗しつつ照射し、護ろうとした「日常性の原理」と「常識水準」の内なる合理性とを、どのように保持し、発展させているであろうか？ 戸坂潤の『日本イデオロギー論』は、「現代日本に於ける日本主義・ファシズム・自由主義・思想の批判」という副題を付されていた。この書物が刊行されて10年後、1945年、第二次世界大戦の敗戦のなかで、「日本主義」と「ファシズム」は世界史的に否定され、すくなくとも表面的には、消滅させられた。ただし、その1945年の8月9日、日本ファシズムの敗北を一週間たらずの後にして、戸坂潤が治安維持法違反事件の被告として獄死している事実は、あらためて想起されてよい。わたくしたちが、今日、自明の前提としている「自由主義」は、日本社会の歴史的事実にあっては、このような犠牲（「人柱」！）なしには実現されなかったのである。

竹内好『日本イデオロギイ』の冒頭に、次のような文章がある。「戸坂潤氏に『日本イデオロギイ論』の労作が^(ママ)あって、つとに名著のほまれが高い。私も戦争中、その抵抗の姿勢の美しい諸篇を、愛読した記憶が